

國分功一郎『スピノザ／読む人の肖像』第2回 レジューメ

2023年7月3日

山野カエル

第二章 準備の問題

スピノザの決意

＞自画像というジャンルの勃興は近代的な自我の目覚めと関係している。その制作は自らを見つめてそれを客観化していく、ある種の弁証法的な課程を伴っているからである「自我」というテーマはスピノザ哲学とはあまり相性がよくない。ただ、自画像の制作は、スピノザが自らを見つめ直す一助になったかもしれない。(79p)

「自我」とスピノザ哲学とはあまり相性がよくないというのはどのようなことからそういえるのか？

＞かつて浅田彰が詩情ゆたかに記したように、スピノザの哲学にはレンブラントの闇の絵画よりも、フェルメールの光の絵画に近い。人間の闇の部分から秩序を生成させようとしたホッブズの哲学がレンブラントに対応するとすれば、スピノザの哲学の中には、レンズを通じて光そのものを画布に定着させようとしたフェルメールの絵画のように、「光がある。／光があって闇はない」[浅田 1991、154頁](82p)

スピノザの哲学は「フェルメールの光の絵画に近い」「光があって闇がない」。闇を照らす光ではなく、闇のない光なのか。

＞「一般生活において通常見られるもののすべてが空虚で無価値であることを経験によって教えられ、また私にとって恐れの原因であり対象であったもののすべてが、それ自体では善でも悪でもなく、ただ心がそれによって動かされた限りにおいてのみ善あるいは悪を含むことを知った時、私はついに決心した、我々にあずかり得る真の善で、他のすべてを捨ててただそれによってのみ心が動かされるような或るものが存在しないかどうか、いやむしろ、一たびそれを発見し獲得した上は、不断最高の喜びを永遠に享受できるような或るものが存在しないかどうかを探究してみよう。(『知性改善論』第一節)」(84p)

スピノザの決意。「真の善」は存在するのか。「不断最高の喜びを永遠に享受できるような或るもの」は存在するのか。それは何か。

＞スピノザが決意した探究はすぐに失敗してしまう(略)この失敗は決して無駄ではなかった。それは貴重な経験を与えた。(略)これらの欲の本性とは何か、どうすればそこから抜け出すことができるか、それを考えている間だけは、精神がこれらの欲から離れ、自らの新しい状態を考えるようになっていた(86p)

これは「失敗」ではなく「探究の一課程」であったのだと読んだ。

準備の問題

＞ここには認識が感情に対してもつ力に注目する『エチカ』の思想の萌芽が見出される。人間はしばしば意志を強くもつことで自らの感情を抑え付け、生き方を変えようとする。(略)しかしそれはスピノザが経験したように結局は失敗する。感情に働きかけることができるのは感情だけだからだ。スピノザが気づいたのは、認識もまたそのような感情を生み出しうるということである。認識には、感情に引きずられている状態にある人間をその受動性から脱出させる力がある。『エチカ』の基本的な思想は、おそらく、スピノザ自身のこのような実体験をもとに構想されたのである。(87p)

「感情に働きかけることができるのは感情だけ」につづいて「認識もまたそのような感情を生み出しうる」というところは、ややこしく読んだ。頭が混乱し理解に苦しんだ。その後の「認識には、感情に引きずられている状態にある人間をその受動性から脱出させる力がある」は、自分の経験にも照らし理解できた。

＞我々はいま総合的方法の出発点となる原理に到達するための準備について考えているわけだが(略)では、準備を巡る問題とは何か。(略)準備とはあることをうまく行うために前もって支度することを言う。スピノザの目指す体系に即して言うなら、総合的方法の出発点となる原因の認識にたどり着いて、そこからうまく論述を進めていくための支度である。(88～89p)

これだけ丁寧に書いてくれるとよくわかる。

＞知ることについての標識はあり得ないと述べ、いわば真理の基準の可能性を否定した以上の議論には、一読しただけでは気づかれないかもしれない驚くべき思想が潜んでいる。それは、にわかに信じがたいが、確かにそうだと考えるほかない、そんな真理観であり、読者はそれによって真理についての根本的な態度変容を迫られることになる。(93p)

重大な発表というような書き出しで、次に何がくるのか期待させる一文だ。

＞スピノザが標識という第二の形象によって示したのは、認識の外側に真理の基準を設けることはできないということである。認識の外側とは、認識するのとは別に、認識した後で、という意味だ。つまり、認識するのとは別に、認識した後で、基準に照らしてその認識が真かどうかを確かめることはできない。認識が真であることは、認識することそのものの内部で、認識することと同時にたしかめられねばならない。したがって、次のようになる。「真理であることが確かになるためには、真の観念を持つこと以外何ら他の標識を必要としない」(第三五節)。すなわち、真の観念の保証とは真の観念を持つことそのものである。(略)真理であること(略)を人間が知るのは、ただ、その人が自ら、真の認識、確実な観念を得た時だけである。(略)観念の外側に真の基準を打ち立てようとする試みは必ず失敗する(93～94p)

「認識の外側に真理の基準を設けることはできない」「そのよう試みは必ず失敗する」。意識したのは、デカルト？それに近代化学的な考え？

＞スピノザはこう考えた。然るべき出発点から、然るべき順序で観念が導き出されていけば、観念を獲得していく行為それ自体が、観念の獲得を指導し、制御していく、と。(略)真であることの保証は観念の獲得という行為そのものに内在している。観念が導かれていく「道」そのものが方法である。したがって、その道は観念の獲得の前には存在しない。道はただ観念を導き出す行為と一体のものとしてのみ存在する。(97p)

＞公共的でありえないものとして真理を捉える真理観と、観念が獲得される道としての方法を捉える方法論は不可分のものであることが分かる。真理の標識は不可能であるのだから、あらかじめ真理のあるべき姿を公共的に示しておくことはできない。ならば、方法は観念を獲得するという行為に内在するものとしてのみあり得る。(97～98p)

ここあたりで「準備の問題」は、どこへいったのかと。わからなくなる。「方法」「道」だけが際立つ感じがして、いまいる場所があやふやになる。(その後読み返し、立ち返り、いまいる場所を確かめる。)

＞『知性改善論』では方法について次のように述べられることになる。「方法とは、反省的認識あるいは観念の観念以外の何ものでもない」(第三八節)

＞この定式には大いに注意せねばならない。この定式が述べているのは、スピノザの考えている方法が実現された時、そこには「反省的認識あるいは観念の観念」が現れるということである。つまり、反省的に認識しようしたり、観念の観念を形成したりしようとするればこの方法が実現されるのではない、この定式はスピノザの方法を実現するために達成すべき目標を述べたものではない。この定式は方法実現の結果を述べたものである。だからスピノザは続けて、物事を理解することが、結果として自己の能力の認識をもたらすと強調するのである。「精神がものを理解することが多くなるにつれて、同時に精神は、理解の道をいっそう容易にたどるための他の新しい道具を獲得していく」。「精神は多くを識れば識るだけ、ますますよく自らの力と自然の秩序を理解する」(第三九、四〇節)(99p)

ここまでスピノザの方法概念へ接近するため「道具」「標識」「道」の三つの形象を取りあげてきた。そして…

＞方法はまず道具として提示され、その否定的側面 ～無限遡行を招いてしまうこと～ が標識の形象を通じて論じられるわけだが、最終的にこの否定的側面を乗り越えるようにして道の形象が語られており、この三つ目の形象には、最初に提示された方法の道具としての側面が含まれている。以上のような弁証法的とも呼ぶべき課程を辿って、『知性改善論』は方法を描き出すのである。

そして出発点の問題

＞問題はこうすればこの方法が実現するのかということである。論点は二つある。然るべき順序とはいかなるものか、そして然るべき順序はいつどこから始まるべきか。(100p)

＞(然るべき順序はいつどこから始まるべきかに、ついて)スピノザは原理のようなものに最初から身を置くことはできないのであって、できるだけ早くそれを獲得することこそを目指さねばならないと考えていた。するとここでは、総合的方法の出発点と、それに先立つ、そこへと向かうための出発点という二つの出発点が問題になっていることになる。(101p)

以下、第2章は、スピノザの「定義論の位置」や「発生的定義」とつづく。出発点の問題は『知性改善論』では明快に描き切れてはおらず、『エチカ』に継承されたということで結末だった。

以上